

〔研究論文〕

発展途上国のリゾート地における大学生の就労に対する意識調査 －インドネシアバリ島を事例として－

黛 陽子

〔Article〕

A Consciousness Survey on Undergraduate Students about Career Choice in World Leading Tourist Resort of Developing Countries －Case of Bali Province in Indonesia－

Yoko MAYUZUMI

Abstract

Recent years, there are some subjects between economic development of tourism industry and concentration of labor populations in world leading tourist resort in developing country. For these subjects, in this study, I focused to know the current situation of the choice of occupation in local residents, and I conducted a consciousness survey to know “the idea of work values for future career choice” for undergraduate students. It is clarified the structure of consciousness of their idea for the personal circumstances and tourism or agriculture. From the results of this survey, to get occupation in tourism industry in Bali province is very popular, about half of the 406 subjects wanted it, only about 1% of subjects wanted to get job in agriculture. Even if their parent engage in agriculture, and even if they have farmland in his family’s house, it turned out that many of them want to choice the tourism industry. As a result of factor analysis, regression analysis, covariance structure analysis, subjects give values to “occupational organizational conditions” based on the impression of “high income” and “glamorous” in the profession. On the other hand, in the result of the covariance structure analysis, in the basic idea of “occupational organizational conditions”, subjects who desire to get occupation in tourism industry give values to “personal life history” based on “nice impression” and “themselves’ hope”. And their potential value that supports this basic idea was “economic value” included in “occupational organizational conditions” based on “the high income that they can have their own families in the future”. In addition, I got the result that all subjects tend to put value on religious activities. This means that, at their spiritual deepest position in “the idea of work values for future career choice”, they recognized that the occupation they choose have to be useful for their lifelong religious activities.

1. はじめに

本研究では、発展途上国の観光リゾート地における、観光業の経済発展と労働人口の集中という課題に対し、現地人の職業選択の現状を捉える事を意図とし、職業選択を行なおうとしている大学生の職業価値志向を知る意識調査に取り組んだ。職業価値志向について、個人的な事情と、特に観

光業と農業への志向を調査し、これらにどのような意識構造があるのかを明らかにすることを目的としている。

本研究で扱う内容は、2点の研究主題を複合した内容となっている。はじめに、これらについてのそれぞれの背景を示し、それを元に論を進める。2点の主題とは、1点目が学生の職業選択意識に関する研究背景、2点目が発展途上国のリゾート地における観光業への人材流出の研究背景となる。前者は大学生と職業選択に関する先行研究を背景とし、後者は発展途上国の1つの事例としてインドネシアバリ島でのリゾート地における観光業への現地人の職業選択の現状を背景としてまとめ、2点の視点を含めた調査を実施した結果を定量的に示す。

1-1 大学生と職業選択に関する先行研究

大学生の職業選択に関し、1980年代においては、大学生の職業決定をテーマに扱った研究が非常に少ないと述べられている(下山 1986)。だが、その後現在に至るまで心理学や社会学で多くの研究がなされている(例えば安達 2003、2004 藤森 1983 安田 1999 等)。自分自身が一般的に仕事に求めることの概念は「職業志向」と定義される。さらに、この職業志向は、生活を維持するための「経済的価値」と、自分の存在価値を見いだす社会的役割に関わる「社会的責任」に関係する(盧 2016)。これは Clausen(1986)によれば、「職業志望が経済的状況に左右されるのは事実だが、労働市場だけに依存するわけではなく、両親の意見や指示、個人的関心の発達、人との出会い、さまざまな生活体験などが絡み合って形成されていく」という。このように、職業志向は「経済的価値」にとどまらず、自分の価値が見いだされるきっかけとなる「社会的責任」とも関連しながら決定される(前田 2009)。さらに、ウィリアムズ(1974)によれば、この「経済的価値」や「社会的責任」は、「おもに連続する過程、それもしばしば欲求、好み、自己発見、感化、機会それに経験などの何年間にもわたる相互関係の結果が影響する」と述べている。この職業選択を「過程」とみなす理論には、Ginzberg、および Super の研究の功績がある。Ginzberg は「それぞれの決定は、その時点に至るまでのその人の経験に関係し、かわって将来に影響を及ぼすのであるから、決定する過程は基本的に変更できない」と述べ、職業志望は一時点のものではなく、長い期間を通じて行われる過程であるという分析を導き出している(Ginzberg 等 1951)。この「過程」の関与の重要性については、下村や木村(1997)は就職活動に関する大学生の社会的援助について、家族から情緒的な社会的援助を主に得ていたことを示した。家族との関わりは一時的に形成されるものではなく人生の「過程」から導かれるものであり、職業志向の「過程」に影響を与えている事がわかる。さらに、この過程が影響し、どのような価値観を求めるようになったかについては「職業価値志向」と呼ばれる(若林他 1983、1986、1989)。また、木村や水野(2004)によれば、修学や進路に関する悩みが深刻であるほど、それについて家族や友達に援助を求める。これを「被援助志向性が高い」と示し、大学生の職業選択においては、親への被援助志向性をもっとも高いと報告した。この親への被援助志向性も大学生の職業価値志向の1つとされる。これに関連し、学生の職業価値志向においては自己効力が影響するという研究事例がある(安達 2001 浦上 1995 廣瀬 1998 等)。自己効力とは、「課題に必要な行動を成功裡に行う能力の自己評価」と定義されている。Guay、Senecal、Gauthier、& Fernet(2003)は親や友達の援助が進路選択に関する自己効力に正の影響を与え、間接的に進路不決断を抑制することを示している。

先行研究における職業価値志向の調査の方法は、本人が自分の仕事に求める重要な価値を尋ね、その価値に関わる自分の気持ちの大小を尺度で回答するリッカートスケール方式をとっている。そ

の価値とは家族をはじめとした個人の生活史で培われた価値観を一つ質問ではなく、複数の視点で測定する。その項目数は、最小で4、最大では230にもなり、かなり幅がある。具体的な質問項目は、たとえば、「自分の能力を正確に評価することができる」「将来どのような生活をしたいか、はっきりしている」「自分がどのような職業分野に向いているかを理解する」「興味のある領域の会社や組織に関する情報を入手できる」等で、「非常に自信がある」から「全く自信がない」といった形のリッカートスケール方式回答となる(廣瀬1998)。

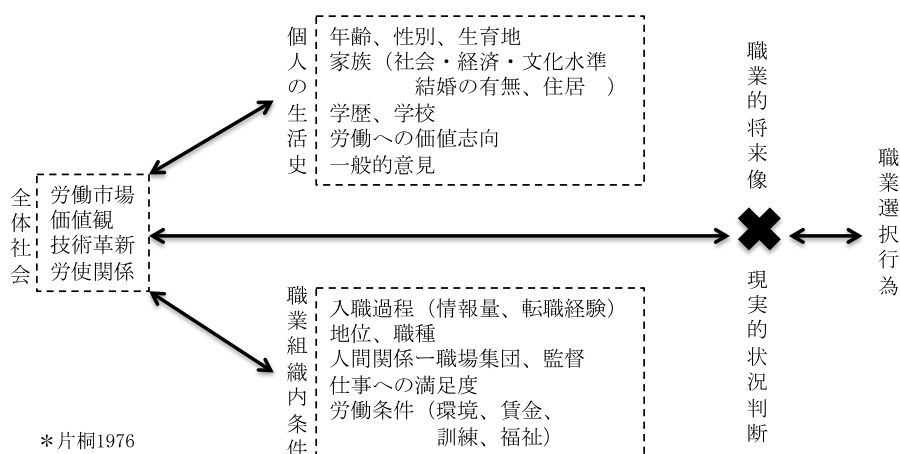


図1 片桐(1976)による職業選択理論

職業価値志向の考え方の基礎論として、片桐(1976)は、「全体社会」「職業組織内条件」「個人の生活史」、という3要素を含んだ枠組みを用いて、職業選択理論をまとめている(図1)。これらが自己効力に影響を与える。片桐は、これら3要素が個人を一定の職業にかり立てる諸要因であり、「個人の生活史」は個人のパーソナリティを強調するものであるパーソナリティ論に、「職業組織内条件」は性別、生育地、労働への価値志向などを検討し、かつ「全体社会」は社会構造論によってそれぞれ議論されるとしている。本調査では、この片桐による職業選択理論の枠組みを参考としながら、これらに経済的安定性や社会的責任を尋ね、職業価値志向の項目を作成した。

1-2 インドネシアバリ島でのリゾート地における観光業への人材流出の現状

インドネシアの経済活動を牽引する1つの要因は観光業であり、観光部門は経済全体の約4%を占め、インドネシアの国内総労働人口のほぼ9%が観光分野で採用されていると推測されている(インドネシア中央統計庁)。さらに政府は2019年までに、GDPの8%を観光分野で支える野心的な目標を掲げている。政府主導の政策で最も観光業に力を入れる事となったバリ島は、経済発展著しい首都ジャカルタを上回る外国人訪問客を獲得し、世界有数の観光リゾート地の地位を築いている。2015年12月のバリのインドネシア中央銀行の発表によると、2016年のバリ島の経済成長は6%から7%の範囲で成長すると予測した。この中で観光部門は前年に引き続き増加傾向を示し、世界旅行・観光協議会(WTTC)に基づき、観光部門は金融部門、運輸、製造よりも4%高い成長が期待されると伝えられた。

表1 バリ州の職業別の人口

事業部門	男性	女性	合計	男性	女性	合計
農業、農業、林業、水産	282,487	263,340	545,827	12.4%	11.6%	24.0%
鉱業および採石業	4,503	4,563	9,066	0.2%	0.2%	0.4%
加工産業	161,722	158,833	320,555	7.1%	7.0%	14.1%
電気、ガス、水道	6,705	2,450	9,155	0.3%	0.1%	0.4%
建物	177,685	33,408	211,093	7.8%	1.5%	9.3%
貿易、ホテルや飲食	287,700	340,885	628,585	12.7%	15.0%	27.6%
輸送、貯蔵およびコミュニケーション	63,063	9,701	72,764	2.8%	0.4%	3.2%
金融、保険およびリース	53,376	39,992	93,368	2.3%	1.8%	4.1%
サービス地域、社会と個人	222,604	160,880	383,484	9.8%	7.1%	16.9%
合計	1,259,845	1,014,052	2,273,897	55.4%	44.6%	100%

*2014 年発表 職業人口 男女別 2013 年結果 バリ州 中央統計局

2014 年発表のバリ州中央統計局による職業人口結果(表 1)によれば、バリ島での職業に就く人々は約 230 万人(バリ島の人口：約 390 万人)、事業部門別で最も従事者が多いのは、貿易、ホテル、飲食部門の約 63 万人で職業人口全体の 27.6%、現在では、バリ州の収入の三分の二を観光業が占めている¹。次いで農業で、農業、林業、水産部門は約 54 万人で 24.0%を占める。だが、2016 年 2 月までのこの部門の労働者の数は 10%減少していると報告された。バリ島での主要な産業の 1 つは農業でありながら、観光業に流出し、年々減少していることが伺える。農家の子供たちは、農業部門外で働くことを好むため、両親の努力を継続することを期待する、とバリ州政府からも警鐘が鳴らされている。この一連の流れの観光業の発展によって、その華やかさや高収入のイメージから、学生が職業選択の際に観光業を選択する傾向があることが推測される。しかし、これは大学生に焦点を当てたバリ州での具体的な調査結果のデータは存在せず、仮説にすぎない。そこで本研究では、「インドネシアバリ島の学生の多くは、職業選択の際に観光業を選ぶ」ことを仮説とし、この仮説の検証を行なう。

2 調査方法

1-1 と 1-2 の研究主題を複合し、本研究では、インドネシアバリ島の大学生を対象とした職業価値志向を知る調査を行なった。バリ島では学歴が小学校卒業である住民も存在する。このため、小中高大すべての卒業時に就労する選択肢を持つ人々がそれぞれ存在する。このため、本調査はそれぞれの層を調査する必要がある。だが、今回の調査では、大学生を対象とした。その理由は、十分な学習期間と人生経験によって比較的是っきりとした自己効力を有し、職業選択を行なえる立場であり、今後の小中高それぞれを対象とした調査への比較対象となる有効なデータを得ることができると考えられるためである。バリ島全土からの大学生の平均的な考え方が得られるように、バリ州(インドネシアの地方行政区画、州は最上位の地方自治体)にある、代表的な国立と私立の中大規模大学を対象とし、調査の受入れ可能な 9 つ大学から回答を得た。調査は 2016 年 5 月に行なった。調査票を回収した被験者は 406 名である。アンケート項目は、「フェースシート」「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」「農業と観光業の融合(アグロツーリズム)の印象」に関する 5 つの分野に分けた内容で質問項目は全 59 項目である(表 2)。なお、観光業と農

業に関する職業の印象については、両者への考え方を比較するために、同じ質問内容で農業と観光業の言葉を入れ替えた形となっている。フェースシート以外の4つの分野の中での50項目の職業価値志向を尋ねる設問に関しては、「あてはまる」から「あてはまらない」について8段階で尋ねるリッカートスケール形式となっている。

調査項目の考え方は、1-1の大学生の職業選択に関する先行研究を元に、構成した。「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」の質問群は、職業価値志向の考え方の片桐(1976)を参考とし、「全体社会」「職業組織内条件」「個人の生活史」、という3要素について尋ねる項目を作った(表2参照)。

表2 職業価値志向の各軸に配置した質問内容

	「全体社会」	「職業組織内条件」	「個人の生活史」
自分の職業に関する考え方		職業の持つ華やかさ・収入を得ることへのこだわり・家族が助けられる条件・職業で実現される社会貢献	自分の若さ・都会志向・他人への自慢となる職業・宗教活動への貢献・自分の決定権・家族の事情による影響
観光業および農業で働くことについて (それぞれに回答)	将来のある職業・村社会の発展の為	収入の高さ・魅力ある外見印象・夢のある職業・魅力ある仕事内容・就業環境が良い・家族を持てる事が出来る職業	自分の夢がかなう・自分で決められる・世間的に希望者が多い・多くの友人が希望・将来に希望する職業・貧困家族の為に働く・家族の期待に答える

被験者の出身県と9つの大学の位置は図2の通りである。被験者はバリ島全土から大学に通う学生を対象としているが、州都のデンパサールの周辺である商業や観光業が盛んな地域を出身とする学生が多い結果となった。この理由として、州都から遠い山間部や辺境地では、所得が低く貧困率も高まるために、大学進学可能な家庭に限られるため、少ないと考えられた。合計406人からの回答を得た(性別の記入がない回答が8あったが、全体数を対象とする場合には有効回答として処理した)得られたデータに関して、単純集計、平均値の比較、因子分析、回帰分析、共分散構造分析を用いて分析を行なった。データの信頼性係数は0.922(クロンバックのアルファ係数)であり、アンケート調査の信頼性の高さは担保されている。

表3 アンケート調査の詳細

調査期間	2016年4月～5月
依頼方法	各大学に直接訪問し、教員へ依頼 教員による受け入れに金銭が必要な場合には、門に立ち学生に直接依頼
対象	バリ州にある国立と私立の9つの大学406名(国立ウダヤナ大学50名、国立観光大学44名、国立サラスワティ大学49名、私立観光経営大学49名、国立ガネーシャ教育大学42名、私立健康科学大学46名、私立外国語大学44名、私立情報技術大学33名、私立教育大学50名)
男女比	男子=163 (39%) and 女子=235 (57%) 不明=8
質問数	59項目
質問内容	フェースシート9問、自分の職業観10問、観光業に関する職業の印象17問、農業に関する職業の印象17問、農業と観光業の融合(アグロツーリズム)の印象6問
調査実施責任	インドネシア政府認可環境財団Bali Biodiversitas

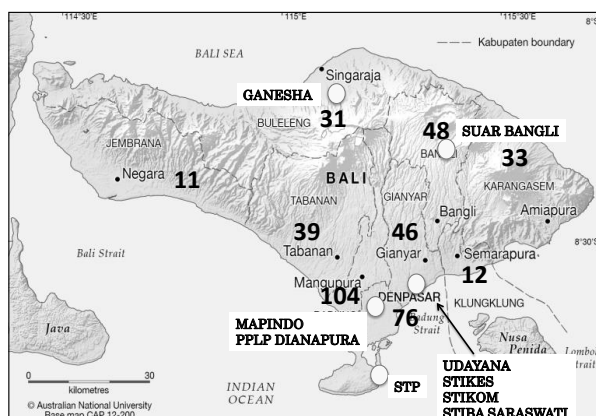


図2 被験者の出身県の数と所属大学の位置

3 調査結果

大学生の職業価値志向に関し、次の3点、3-1「職業選択の考え方」の価値群から捉えられる観光業に対する基本的姿勢、3-2 親の職業による観光業への職業価値志向への影響、3-3「職業選択の考え方」と「観光業に関する職業の印象」の価値群の相互関係、これらに着目し、大学生の観光業を選択する事へ与える要因を明らかにすることを目的として分析を行なった。

3-1 「職業選択の考え方」の価値群から捉えられる観光業に対する基本的姿勢

「職業選択の考え方」の質問グループの中の10の職業価値志向について、男女の回答傾向に差があるかを調べた(Mann-Whitney U test、 $P<0.05$) (表5)。「家族の事情による影響」の価値以外差が見いだされなかった。このため全被験者を対象とし、「職業選択の考え方」の質問グループの中の10の価値での考え方の傾向を調べるために因子分析(主因子法バリマックス回転、標準妥当性0.822 有意確率0.000)を行った。その結果3因子得られた(表5)。第1因子では因子寄与率がどの価値も高い結果を得たが、特に「家族を助けられる条件」「収入を得ることへのこだわり」が高く、これは「収入への魅力」と考えられた。第2因子では「職業の持つ華やかさ」「自分の若さ」が高く、これは「若さゆえのあこがれ」と考えられた。第3因子では「家族の事情による影響」と考えられた。これらは先の図1の片桐による職業価値志向の各軸に当てはめると、第1因子は「職業組織内条件」、第2因子は「個人の生活史」と「職業組織内条件」が、第3因子は「個人の生活史」となった。被験者の代表的な考え方は「職業組織内条件」に価値をおいている事が示唆された。

被験者全員を対象とした回帰分析(最適尺度法、 $R^2=0.455$) (表5)では、「職業選択の考え方」の質問グループの中の10の価値を従属変数とし、「フェースシート」での「将来就きたい職業(選択肢: 観光業・農業・公務員・医療関係・その他ほかサービス・会社員・その他)」の質問を独立変数として分析した。その結果、希望する職業に対して高く影響を与えた価値は「宗教活動への貢献」「職業の持つ華やかさ」であり、マイナスの影響を与えていたのは「家族を助けられる条件」となった。この結果から、図1の「宗教活動への貢献」は「個人の生活史」に、「職業の持つ華やかさ」と「家族を助けられる条件」は「職業組織内条件」が当てはまり、「職業組織内条件」を特に重視している傾向が見

られた。「宗教活動への貢献」という価値については、バリ島民は90%がヒンドゥー教であり、村単位での盛んな宗教活動が生まれた時から生活の一部として根付いているために質問項目に入れているが、この結果から宗教活動が職業価値志向に影響を高く与えている事が示唆された。

これら2つの分析結果から、大学生全体を対象とした「職業選択の考え方」の質問グループでは、収入の高さや華やかな印象を背景とした「収入への魅力」が大きく影響する、「職業組織内条件」を重視して職業選択を行なっている事が考えられた。

3-2 親の職業による観光業への職業価値志向への影響

被験者全体(n=406)における希望する職業について、204名49.4%が観光業に就くことを希望するという回答を得た(表4)。農業を希望したのはわずか5名1.2%であった。親の職業を見ると、観光業よりも農業に従事している者が多い。かつ、観光業を希望する大学生の親の職業の約30%が観光業で、25%が農業であった。これは、農業に従事する親を持っていたとしても、自らは農業を希望していないことを意味する。また、親の職業に関わらず全員に「家族所有の農地を持っているかどうか」という設問に対し、109名が「持っている」と回答し、その中で「実家の農地で農業を次ぐ責任があるかどうか」については、41名38.6%が「責任がある」と回答した。この農地所有者の親の職業について尋ねると、農業が81人で74.3%、観光業は11名10%であった。この結果からもわかるように、親が農業に従事し、子供の自分が農業を次ぐ責任を持っているとしても、農業につくことを希望しておらず、親の職業に関わらず観光業を多くが希望する傾向が見られた。

表4 希望する職業と親の職業

	人数	%	親の職業	%
観光業	204	49.4	84	20.3
農業	5	1.2	105	25.4
公務員	94	22.8	82	19.9
医療・福祉	40	9.7	5	1.2
小売り・サービス	1	0.2	10	2.4
会社員	13	3.1	7	1.7
その他	44	10.7	99	24.0
不明	5	2.9	14	4.8

表5 「職業選択の考え方」に関する分析結果

「職業選択の考え方」の価値	因子分析の結果			Mann-Whitney Utest P値	回帰分析の結果 標準化係数
	第1因子	第2因子	第3因子		
職業の持つ華やかさ	0.158	0.761	0.015	0.143	0.209
自分の若さ	0.307	0.658	0.009	0.653	-0.150
都会志向	0.316	0.283	0.216	0.143	0.100
他人への自慢となる職業	0.437	0.376	0.040	0.672	0.064
収入を得ることへのこだわり	0.641	0.302	0.152	0.156	0.165
家族を助けられる条件	0.803	0.113	0.039	0.577	-0.200
職業で実現される社会貢献	0.532	0.263	0.046	0.231	0.064
宗教活動への貢献	0.511	0.191	0.261	0.730	0.218
自分の決定権	0.489	0.157	-0.119	0.619	0.129
家族の事情による影響	0.023	0.001	0.701	0.021	0.165

p=0.000

p<0.05

R²=0.455

3-3 「職業選択の考え方」と「観光業に関する職業の印象」の価値群の相互関係

「フェースシート」での「将来就きたい職業」の質問で、観光業と回答した 204 名を対象として回帰分析を行なった。「観光業に関する職業の印象」の質問グループ中 15 項目の価値について、「自分の夢がかなう(自分の夢は観光業で働く事である)」という項目を独立変数として、その他の 14 の価値を従属変数とし、職業価値志向の分析を行なった(表 5)。回帰分析(最適尺度法)($R^2=0.768$)の結果、最もプラスに高く影響を与えた価値は「素敵だと思う」、2 番目は「自分の希望」、3 番目は「夢のある職業」となった。「就業環境が良い(観光業の働く場所の環境に魅力を感じている)」は高くマイナスの影響を与えており、観光業の施設の清潔さや美しさへの価値は自分の夢にあまり関わっていないと考えられた。「素敵だと思う」と「自分の希望」は「個人の生活史」にあてはまり、「夢のある職業」と「就業環境が良い」は「職業組織内条件」にあてはまり、両方の視点を重視していると考えられた。この結果から、大学生で観光業を希望している被験者は、観光業を素敵だと思い、かつ自分の意志で選ぶことが示唆された。

表 6 「観光業で働くことが自分の夢である」に対する回帰分析の結果

(n=204 希望する職業を観光業と回答した被験者) * $R^2=0.768$

観光業に関する職業価値志向	標準化係数
収入の高さ	-0.023
自分の希望	0.254
夢のある職業	0.247
将来のある職業	0.108
素敵だと思う	0.389
魅力ある仕事内容	0.067
村社会の発展の為	0.080
就業環境が良い	-0.178
世間的に希望者が多い	0.107
多くの友人が希望	0.069
家族を持てる事が出来る職業	0.069
将来に希望する職業	-0.091
貧困家族の為に働く	0.120
家族の期待に答える	-0.102

次に、さらに、「職業選択の考え方」と「観光業に関する職業の印象」について、男女別、全体で共分散構造分析を行なった。男女別に分析した理由は、「観光業に関する職業の印象」の質問群 15 問中 5 問について差が見られたためである(Mann-Whitney U test, $P<0.05$)。しかしながら結果として、最もあてはまりが良かった(RMSEA=0.88)点と、モデル内容に差がほとんど見られなかったことから、全体(n=406)を対象とした結果を示す(図 3)。潜在変数の「職業価値志向」に対し「職業選択の考え方」における変数の内、標準化係数から判断される因果関係が高い変数は、「宗教活動への貢献」と「自分の決定権」であった。この潜在変数「職業価値志向」に対し、標準化係数から判断される因果関係が高い潜在変数は「観光業に対する経済的要因」であった。この潜在変数「観光業に対する経済的要因」に対し、標準化係数から判断される因果関係が高い変数は、「家族を持つ事が出来る職業」であった。この結果から、「職業価値志向」の基本的考え方は、宗教活動に貢献できる事に高い精神性を持ち、かつ自分で決めるという姿勢を持つ。そして観光業への「職業価値志向」は将来自分が持つ家族を養う事が出来ることに大きな価値をおいた経済的魅力に支えられている、ことが考えられた。

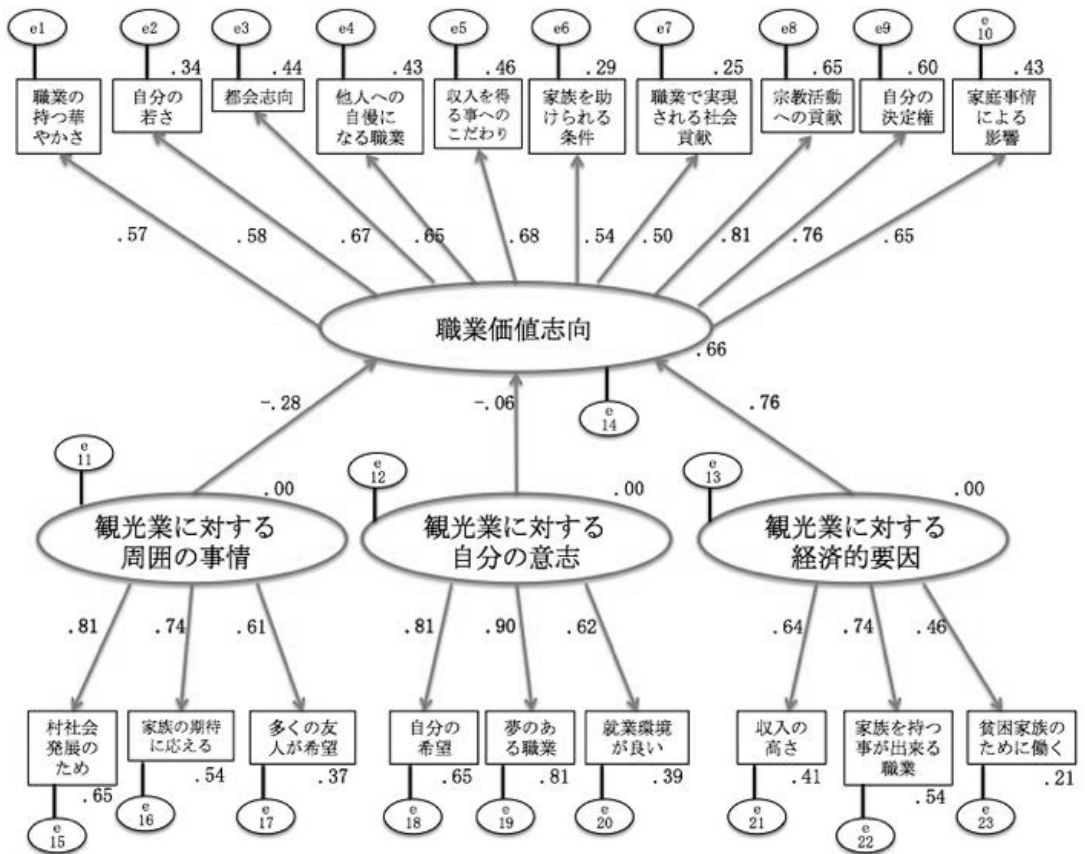


図3「職業選択の考え方」と「観光業に関する職業の印象」に関する共分散構造分析の結果

*RMSEA=0.88

*上段□が「職業選択の考え方」の変数、下段□が「観光業に関する職業の印象」の変数

4. 考察

本調査結果から、バリ州での観光業に対する職業の人気は非常に高く、被験者の約半数が希望しており、農業には約1%しか希望していなかった。また、親の職業が農業であっても、かつ実家に農地を有していても、多くが観光業に流出してしまうことがわかった。大学生の職業価値志向の基本的姿勢は、その職業に対して、収入の高さと華やかさの印象を持っている点を背景とした「職業組織内条件」を重視していた。また、「個人の生活史」の中で高い影響を受けると1-1で触れた先行研究で考えられていた「親からの影響」に関しては、今回の調査結果からは見いだす事が出来なかった。その理由として、親の職業に関わらず、被験者の大学生は観光業を多くが希望する傾向が得られたためである。観光業を希望する被験者の職業価値志向の基本的姿勢は、全体の傾向であった「職業組織内条件」よりもむしろ、素敵な印象や自分の希望を優先すると言った「個人の生活史」が優

先されていた。だが、これを支える価値観は、将来の家族を持てる収入の高さを背景とする経済的価値にあった。また、被験者全員または観光業を希望する者の両方の結果で、宗教活動へ価値をおく結果が得られた。これに関しては、大学生の職業価値志向の精神的なもっとも深い位置に宗教活動に役立つ事につながることの重要性を認識している事と考えられた。これは、1-1の大学生と職業選択に関する先行研究における考え方の中では得られなかった異文化の視点として課題を残す事となった。

今後の課題としては、職業選択を行なう機会を同じく持つ高校生や中学生を対象とする。小学校卒業で就業する事例もまだ多く存在するが、アンケート内容への理解をする事が困難である事が考えられるため、アンケート調査の方法を見直す必要がある。このため、高校生と中学生のそれぞれを対象とした同じ調査を行う事で、今回の結果と比較しバリ島全体の職業選択の現状を捉える課題がある。さらに、本研究結果は、インドネシアバリ島だけを焦点としてまとめられるべきではなく、同じ状況にある発展途上国の他の国際リゾート地についても比較分析を行なうことが今後の課題である。

【引用文献】

- 1) 安達智子(2001)『大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討』教育心理学研究 49(3)pp326-336
- 2) 安達智子(2003)『大学生の職業興味形成プロセス』教育心理学研究 51 pp308-318
- 3) 安達智子(2004-12)『大学生のキャリア選択 その心理的背景と支援』日本労働研究雑誌 46(12) pp27-37
- 4) 足立浩一(2015)『バリ島における観光開発が伝統社会におよぼす影響に関する考察』福山大学経済学論集
- 5) 浦上昌則(1995)『学生の進路選択に対する自己効力に関する研究』名古屋大学教育学部紀要・教育心理学科 42pp115-126
- 6) 片桐雅隆(1976)『職業選択の理論』組織科学 10(1)pp66-74
- 7) 木村真人・水野治久(2004)『大学生の被援助志向性と 心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—』カウンセリング研究 第37巻 pp260-269
- 8) 下村英雄・木村周(1997)『大学生の就職活動ストレス とソーシャルサポートの検討』進路指導研究 18巻 pp9-16
- 9) W. M. ウィリアムズ編, 吉井弘訳(1980)『職業選択の理論: 社会学的理論をめざして』誠信書房
- 10) 永野由紀子(2007)『インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体』山形大学紀要(社会科学)第1-4巻2号
- 11) 成田絵吏・森田美弥子(2012)『大学生における職業の選択に関する被援助志向性の研究』名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 Vol.59 pp91-100.
- 12) 廣瀬英子(1998)「進路に関する自己効力研究の発展と課題」『教育心理学研究』46(3): 343-355.
- 13) 前田 信彦(2009-03)『大学から職業キャリアへの移行と学習過程・学生生活—学部4回生における「潜在的無業層」の分析—』立命館高等教育研究(9)pp141-158
- 14) 黛陽子(2016)『農業を選択しない若者の職業観を知る意識調査—インドネシアバリ島における事例調査—』地域学会年次大会発表論文集
- 15) 安田雪(1999)『大学生の就職活動』中公新書

- 16) 盧回男(2016.9)『「ライフキャリア志向性」を規定する家庭環境要因と個人特性要因の効果 ―日韓比較を通して―』日本女子大学現代女性キャリア研究所 現代女性とキャリア, **Research Institute for Women and Careers** 8 pp83-99
- 17) 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子(1983)『職業レディネスと職業選択の構造』名古屋大学教育学部紀要 30 pp63-68
- 18) 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子(1986)『女子短大生における性役割社会化と職業興味』名古屋大学教育学部紀要 33 pp173-212
- 19) 若林 満・後藤宗理・宗方比佐子(1989)『女子学生の職業興味と職業選択』名古屋大学教育学部紀要 36 pp1-32
- 20) バリ州 労働移民局(2015年8月)「学歴と職業分野」
- 21) バリ州 中央統計局 「職業人口 男女別 2013年結果」
- 22) National Republika(17 May 2016)“NTP Turun, Pendapatan Petani di Bali tetap Rendah”『引き続き債券を抱えるバリ農家』<http://nasional.republika.co.id/berita/nasional/daerah/16/05/17/o7bg08359-ntp-turun-pendapatan-petani-di-bali-tetap-rendah>
- 23) The Bali Times(04 December 2015) “Economic of Bali is Predicted Growing 7.03%”
- 24) Guay F., Senecal C., Gauthier L., Fernet C.(2003) “Predicting Career Indecision: A Self-Determination Theory Perspective.” *Journal of Counseling Psychology* 50 pp165-177.
- 25) Clausen J.(1986), “The Life Course: A Sociological Perspective, Prentice-Hall.”(佐藤慶幸・小島茂訳(1987)『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部 邦訳 p172
- 26) Super, D. E.(1980) “A life-plan, life-space approach career development” *Journal of Vocational Behavior* 16(3)pp282-298.
- 27) Ginzberg, Eli, Sol W. Ginsburg, Sidney Axelrad(1951)“Occupational choice : an approach to a general theory” New York Columbia Univ. Press.

*本稿作成にあたり、文教大学国際学部黛ゼミナール4期生の黒澤惟さん、桑田絢香さん、木下奈津貴さんに、調査データ入力及び本テーマの卒業論文での取り組みにおいてご協力を得ました。

